第 177 号

館長だより

山形県産業科学館

令和７年２月２３日(日)

発行 館長　加 藤 智 一

ヒトはなぜ学ぶのか

ちょっと気になる本がありましたので紹介します。それは、『なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える』（講談社現代新書 安藤 寿康　著)です。以下ほぼ抜粋。

私たちが学校や学校以外のさまざまな機会を通じて学習しなければならないのは、頭をよくするためでもなければ、成績を上げてよい学校に進学するためでもなければ、豊かな生活をするためでもありません。「教育」や「学習」には、進化学的で生物学的な理由があります。大切なのは、「どう」学べば他人と比べて成績を上げられるかではありません。「何を」学べばあなたが生きていくのに意味があるかなのです。

学力の個人差における遺伝の影響は 50%と言われています。しかし、これは決して残酷な現実ではありません。皆さんの遺伝的素質を花開かせるために、教育があり、学習があるのです。教育とは決して他人よりもよい成績をとろうと競い合うためでなく、また自分自身の楽しみを追求するためでもなく、むしろ他の人たちと知識を通じてつながりあうためにあります。その意味で、ヒトは進化的に、生物学的に、教育で生きる動物なのです。

暗く湿った場所を好んで生きるモジホコリという不気味な名前の粘菌は、単細胞のくせに肉眼で見えるほど大きく育ちますが、これもまた迷路を学習したり環境の温度変化を予測できるようになることがわかっています。こんな学習をコンピュータにやらせようとすると、環境変化の情報をフーリエ変換というむずかしい関数計算で処理しないとできないそうで、単細胞動物のこうした能力を用いて粘菌コンピュータなる物を作ろうという試みもなされているそうです。彼らは決して無条件反射しかしていないただの本能マシーンなのではなく、ある種の「知性」を持ち、学習をして自らの行動を環境により的確に適応させているのです。こうした学習の結果、将来同じ場面に出くわしたときに自身の行動を環境に適応させるための変化が動物の内部に起こります。ゾウリムシや粘菌とヒトでは、その変化が生じる仕組みはまったく異なりますが、とにかくなんらかの安定した変化が生じます。それは、言い換えれば、「記憶」あるいは「知識」と呼ぶことができるでしょう。

ゾウリムシも「知識」を「学習」し、「記憶」を持っているわけです。新たに知識を持つことで、動物はより生き延びやすくなります。逆に、知識を学習しなければ、動物は食べ物や安全を得そこねて、死に至ることでしょう。ですから単細胞動物からヒトに至るいかなる動物も、必要に応じていやでも学習を行います。このように学習とは生き延びるために知識を得ようとするものですから、それは食欲や性欲と同じように本能であり、「欲」といえるのではないでしょうか。

なんてことが書いてあります。是非手に取って読んでみてください。

「シルバー川柳」

私たち世代になると、決して笑えない切実な問題ですが、あえて他人事のように、明るく笑い飛ばしてしまいましょう。

「バカにするな」とか、「冗談じゃない」とか、真剣に考えないでくださいね。ネット上で見つけた「シルバー川柳」です。

・メルカリで、誰も買わないワシの服
・女房から生前退位せまられる
・オレオレの相手をしたいほどの暇
・若作りしても話題はみな昭和
・徘徊のルート AI にも読めず
・デイサービス「お迎えです」はやめてくれ
・朝起きて調子いいから医者に行く
・仲いいねいいえ夫は杖代わり
・「インスタバエ」新種の蝿かと孫に問い
・Siri だけは何度聞いても怒らない
・靴下を立って履くのは E 難度
・私だけ伴侶がいると妻嘆く
・無宗教今は全てが神頼み
・じいちゃんにスマホ教える孫 5 才
・自分でも事実か分からぬ武勇伝
・懐メロが新し過ぎて歌えない
・ベンツから乗り換えたのは車椅子